

認知言語学を応用した英語学習

—英語学習の効率化に向けて—

キーワード: 認知言語学、有意味的学習、知識の二重構造

山本 幸一

1. はじめに

外国語としての英語学習の中心課題の一つに、「効率化」が挙げられる。ただし、昨今のコミュニケーションを重視した時流においては、この「効率化」について誤解を受けないことを感ぜずにはいられない。「英語の授業は英語で行う」、「英語で考える」、「～分で英語が話せる」、「聞くだけで英語が話せる」等々、「トンデモ論」が横行しているからである。本稿は、大学の授業で筆者が担当している認知言語学入門やエッセイライティングの授業での、地道な英語学習における効率化を目指した取り組みについての報告である。

2. 知識の二重構造

昨今の英語教育については、「聞く」、「話す」の「コミュニケーション」が重視され、例えば、高等学校の科目名から「読む」、「書く」が消えているように、学習の基本である「読む」、「書く」が軽視されている。このことは英語学習にとって大きな損失である。当然のことながら、英語圏に生まれ育てば、膨大な時間、英語に接して、話し言葉から始め、母語として英語を習得できるが、日本で学ぶ場合は、膨大な時間、英語に接する環境にないため、少ない学習時間を効率的に使う必要があるからである。それには、「加速装置」として、演繹的な文法解説や日本語訳の活用を含め、文字媒体である「読む」、「書く」を通した、言語への「意識化」を重視した学習が不可欠である。また、ネット情報やeメールでの rapid reading, rapid writing という文字情報の高速処理が要求される時代であればなおさらそのことが言える。

他方、「知識の二重構造」という問題も避けては通れない。文法知識を「宣言的知識」ではなく、「手続き的知識」とすること、つまり、学習して活用を待つだけの「知識」ではなく、「技能」として活用できる文法知識に高めるためには、多量に読む・聞く・書く・話すという言語活動を豊富に行い、文法知識を「自動化」する必要がある。また、言語は音声的に構成されているので、音声訓練が不可欠であり、文字と音を連動させる必要がある。英語学習は「意識化 (consciousness raising)」と「自動

化(automatization)」、つまり、一方で「学習」(learning) (母語を通じた理解と思考を通して、学習を効率的に進める)、他方で「獲得」(acquisition = let English grow) (外国語に多く触れ、英語を育てる側面。特に音声に慣れること)という複線で進めることが重要である。特に、基礎段階では、この複線が不可欠であり、この2面のどちらかに偏ることなく進めるべきである。英語を聞いて理解できるまで耳を慣らすには膨大な時間が必要であり、基礎のできていない段階で英語だけの授業を行えば、ほとんど理解できず、学習への挫折感を持たせるだけである。他方、既知のことだけでなく、未知のことを聞いて理解できる英語力を持った高いレベルに学習者があれば、All in English で行う授業が一部あることも積極的な意義がある。

「学習」と「獲得」という2つの側面について、更に考えてみると、「学習」は、精読による内容理解の深化や文法構造の把握、そして、「ことばへの気づき」を喚起することができる。また、文字通りの意味だけでなく、行間に込められた作者の隠れた意図をも汲み取る理解力や思考力を養うこともできる。これらは、メタ言語として、母語である日本語を使ってこそ可能になると言える。他方、英語に多量に触れたり、言語活動を通しての「獲得」という面については、言語の本質が「音」であるため、理屈抜きに「音声」に多量に触れる必要がある。聴き取りができるには、数千時間という音声の体験が必要である。また、教室でも多読をさせたり、積極的に英語を使うことも必要であるが、限られた授業時間だけで足りるはずはないので、メディアや異文化交流を積極的に活用し、英語との接触量を増やさせるよう自学を促す必要がある。

学ぶべき英語についてはどうであろうか。英語は、世界の共通語となり、母語話者よりも非母語話者とのコミュニケーションの割合が増加しているのが現況である。母語話者を模範としつつも、母語話者崇拜からは脱却し、母語話者の英語とは結果的に異なる日本式英語であっても、積極的に表現することを最優先すべきと考える。もちろん、文法や発音がでたらめであっていいということではない。学習の努力の結果として、母語話者とは違った英語となるのは避けられないということで、そのような英語でも、外に向かって自己を表現することに消極的であってはいけないということである。

3. 大学での授業

2節で述べた原則を踏まえての実際の授業について述べることにする。現在、筆者が担当している大学での授業は、言語学概論、ライティング、総合的英語の授業である。英語の能力を、BICS (Basic Interpersonal Communication Skills=会話能力)とCALP (Cognitive Academic Language Proficiency = 学習言語能力)から見た場合、英語圏で生活しないと身につかない生活上の表現等BICSの指導については、英語圏で生まれ育ったネイティブスピーカーに依存する場面が多いのに対して、日本人教員はCALPの指導に、大いに貢献できると考える。昨今、学生の発音や聴解力がよくなっているのとは裏腹に、書き言葉の力が落ちていることを聞く。英語圏以外の英語非ネイティブスピーカーとのやりとりが増える現在において重要なのは、発音という外的なものより、論理構造の構築という内容面である。必要なのは、自己の考えを発信し、交渉し、説得、反論でき、

問題解決できる英語力であり、クリティカルシンキング、ディベート、論理性の養成が重要である。これらを日本語でも苦手とする大学生が多いと考えられる。現在担当している大学生の中には、幼少期に英語圏で過ごした帰国子女も少なからずいるが、BICSは優れていても、CALPの訓練の必要がある。論文等の情報も、英語による入手が日本語での何倍も多く、研究成果を世界に発信するにも英語でなくては読んでもらえない時代である。独創的なアイデアを世界に発信できるような英語でのプレゼンテーション力も身につける必要がある。現在、このような考えで、大学生にパラグラフライティングの指導を行っている。

また、日本語の論理的使用を鍛えることも大事であると考えている。日本人にとって、日本語こそが自由自在に使える大切な思考の道具である。ノーベル賞受賞者数を見ても、英語力の弱いと言われる日本人に受賞者が多いのに対して、英語力が高いと言われるアジアの近隣国でノーベル賞受賞者が生まれていない。このことは、日本語での思考の重要性を物語っていると考えられる。欧米以外で自国語で科学できる国が少ないことを考えても、日本語で科学できることは貴重である。言葉は知の活動と、独自性の創出のための最も基本的な土台であり、英語とともに、母語である日本語の論理的使用を鍛えることを心掛けることが重要である。ライティングの授業で、学生に常々述べているのは次の点である。

1. 「ライティングは建築である」。日本語の文章は、設計図の不明なものが多く、「何が言いたいのか分からない」文章になりがちである。英文という建築物を解体して、その構造やしくみを理解し、自分の意見を論理的に構築し提示する「エッセイライティング」に向けた文章構成技術の習得が必要。
2. 「ライティングは技能であり、学習を必要とする」。ライティングは日常会話以上の深いレベルの伝達手段であり、自然に身につくものではない。また、言語だけのコミュニケーションなので、誤解が生じないよう、使用する表現を吟味し、精密に論を組み立てる必要がある。ただし、書きながら意見が精緻化されるのも事実で、「書くことによって、思考を整理して深められる」。
3. 「日本語で明確に表現できなければ、英語で明確な文章を書くことはできない」。日本人にとって、日本語は、思考を鍛える上で最も基本的な土台である。英文法や語法という知識が根であれば、日本語は大地で、その基盤の上に英語の花や果実が育つ。遠回りのようではあるが、母語である日本語の論理性を向上させたり、日本語と英語を対比してそれぞれの特徴を客観的に捉えることも、英語を学ぶ過程において大切である。

以上、筆者が大学で実践する英語の授業内容について述べてきた。次節では、認知言語学の知見を英語学習に応用して、効率的な学習方法を身につけられる指導について述べることにする。外的世界を意味ある対象として読み取る心の働きを「認知」とすれば、言語は認知能力の一翼を占めているのと同時に、認知能力に基づいて構築されている。このような認知と言語の関係を研究するのが「認知言語学」である。その主張の1つに、言語の意味は概念化であり、言語は意味的に動機づけられ、大方において説明可能であるということがある。今年度は、この言語学の基本概念を応用し、特に、意味変化や、言語表現の構造に見える動機づけ、そして、日英語での概念世界の切り取り方の違いに見る日英対照研究の知見の3点を、英語学習に応用する方法として中心に指導した。以降では、言語学概論の授業でテキストの補足として用いたハンドアウトを掲載しながらの

報告とする。

4. 認知言語学の応用

認知言語学の応用として、今年度取り組んだ中から 3 点を見てみよう。比喩的意味変化による多義語の学習、機械的記憶ではなく、言語表現の構成を考えての有意義的学習、そして、日英対照分析による、概念化の違いと語義の比較を通しての学習である。

5. 認知言語学の英語学習への応用について

認知言語学の紹介に続いて、英語学習への言語学の応用について話した。

5. 1 認知言語学(Cognitive Linguistics)とは？

言葉は、人間が現実世界をどのように受け止めているかという捉え方(construal)を基盤にして成立している、と考えられる。同じ世界を見ても、次の (a) (b) (c) ではどういう捉え方の違いが現れているであろうか。

- (1)(a) The glass is half empty.
(b) The glass is half full.

- (2)(a) The knob is above the keyhole.
(b) The keyhole is below the knob.

- (3)(a) We are approaching the goal.
(b) The goal is approaching.

- (4)(a) Someone broke the window.
(b) The window was broken by someone.

- (5)(a) John opened the door with this key.
(b) The key opened the door.
(c) The door opened.

(6)(a) The team are playing hard.

(b) The team is playing hard.

認知言語学の意味観

同じ客観世界に接しても、捉え方が異なれば意味は異なる。言語化する客観世界の意味に加えて、捉え方 (construal) が意味を形作る重要な要因と考える。Langacker (1987) によれば、「意味は概念化に等しい」ということになる。それは次のような記述に表れている。

“Cognitive grammar therefore equates meaning with conceptualization.”

(Langacker (1987: 5))

このような考えの認知言語学では、言語は認知的に動機づけられている (motivated) と考える。そして、言語の姿に人間の認知の営みの特徴に由来する刻印が見つかり、言語が大方において説明可能 (accountable) であると考え。従って、認知言語学の言語分析方法は、言語現象を司る原理を、より一般的な認知的原理から導き出すことになり、多くの心理学的な概念を前提とすることになる。

記号体系としての文法 (the symbolic view of grammar)

Langacker によれば、言語は、形態素、語、句、文のいずれの単位であっても、形式と意味との組み合わせ (form-meaning pairings) である記号 (symbol) から構成されていると捉えている。それは次のような記述に表れている。

“Meaning is what language is all about.”

(Langacker (1987: 12))

認知と一般認知能力

認知言語学では、言語と一般認知能力が密接不可分な関係にあると捉えている。環境世界の中で生きる人間には、感覚受容器によって得られる五感や、運動、内蔵感覚等があり、これが「感覚 (sensation)」である。感覚が統合処理され、より高次の情報処理を行う場合が「知覚 (perception)」である。知覚が更に統合処理され、概念化と関わるより高次の情報処理を行う場合が「認知 (cognition)」である。

「一般認知能力 (general cognitive ability)」とは、記憶の想起、推論、思考、判断を始め、空間認知、観点 (viewpoint)、イメージ形成、慣習化、そして、パースペクティブ (perspective) [図地分化、主体化 (subjectification)、心的走査 (mental scanning)]、カテゴリー化、比喩 (比較、連想、意味の拡大縮小)、参照点能力等の能力を指し示している。

5.2 英語学習の2面

(1) 英語圏での母語としての習得のように、たくさん触れて、文法知識を「自動化(automatization)」する。

「獲得」(acquisition = immersion = to let English grow)

BICS(会話能力)中心

文法知識を、単なる「知識(knowledge)」ではなく、活用できる「技能(skill)」にするために、聞く、話すという音声活動を豊富に行い、文法知識を「自動化」する必要がある。同時に、言語は「音声」が本質なので、「音声化」の訓練が不可欠で、日本語を介在させなくても、英語だけでイメージが浮かび意味を理解できる「音声と意味の直接連想(direct association)」に向けた訓練が必要である。

「話されるスピード」と「音の崩れ(connected speech)」に慣れるため、数千時間以上の音声体験が必要である。「何年学んでも英語が使えない」という学習者の不満の裏には、英語が聴き取れないことが大きな原因として存在している。聴く力をつけるには、英語ニュースや海外ドラマを視聴することが薦められる。

(2) 外国語学習として、限られた時間を効率的に使い学習する。「学習」(learning)

「ことばへの気づきの喚起(consciousness raising)」

CALP(学習言語能力)中心

膨大な時間英語に接して、話し言葉から始め、母語として英語を習得する英語圏の環境と違い、日本で外国語環境で学ぶ場合は、限られた学習時間を効率的に使う必要がある。それには、文字媒体である「読む」「書く」を通し、「文法」を学習した、言語への「意識化」を重視した学習が、効率化のための「加速装置」として重要である。

精読による内容理解の深化や文法構造の把握、そして、「ことばへの気づき」を喚起する必要。文字通りの意味だけでなく、行間に込められた作者の隠れた意図をも汲み取る理解力や思考力も養う必要。

日常会話だけで事足りるのなら(1)だけでよいが、職業として高度な英語を運用したり、英語で研究発表をしたり、留学して、資料を多く読みペーパーを書く場合は、(2)のプロセスを経て論理的で緻密な文章構築力を身につける必要がある。

「言語学」が活用できるのは、(2)の側面で、「ことばへの気づき」を喚起できる。

5.3 認知言語学の英語学習への応用

文系の学問は、教養という面が強く、すぐに見返りが期待し難い面がある。しかし、認知言語学は、意味論であり、具体的で日常的な面が色濃く、応用の道は見つかり易い。今後、できれば、授

業のテキストのような入門書以外にも認知言語学(や他の言語学)の専門文献を使い、学生各自で勉強を進め、その考え方を応用して、英語学習を効率的に行い、英語の学力向上に役立ててもらいたい。

6. 意味変化

3大比喩である、メタファー、メトニミー、シネクドキを学習させた。それによって、語義の意味変化の過程を理解した上で語義を記憶する習慣を持ってもらおうというものである。

6. 1 多義語 (polysemous word) の習得への応用

言葉の意味は変化する (semantic change)

nice 意味は元々は「愚か」という意味である。どのように変容したか。

「愚か」→ () → () → 「素晴らしい」

意味の変化が共存する場合 → 多義性 (polysemy)

court 「(テニスなどの)コート」の意味は誰でも分かるであろう。

「裁判所」という意味は新たに記憶の必要があるであろう。

違った意味がある、としてだけ記憶すべきだろうか。

この両者の意味に関連を見つければ記憶の定着はよいのではないか。

figure out 「理解する」と「フィギュア」の意味の関係は？

6. 2 意味変化の3大要因

メタファー	(metaphor)	類似性(類似点があること)による比喩
メトニミー	(metonymy)	隣接性(関連があること)による比喩
シネクドキ	(synecdoche)	カテゴリーの上下関係(類と種の関係)による比喩

例

メタファー ある女の子のことを、白雪姫 (snow white)

→ 色白で清楚なところが雪(の白さ)と類似点があるから。

メニミー ある女の子のことを、赤ずきんちゃん (Little Red Riding Hood)
→ いつも被っている赤ずきんと関連がある。

シネクドキ ある人魚のことを、人魚姫 (Mermaid)
→ 所属している類 (集合) によって種 (個体) を表現する。

シネクドキは2種類から成る

類で種を表す アルコール → 類 (集合) によって種 (個体: 酒)

種で類を表す 小野小町 → 種 (個体) によって類 (集合: 美人)

いずれの要因か? 上記の3つから選び()に記入しなさい。

メタ、メト、シネの略語で答えなさい。

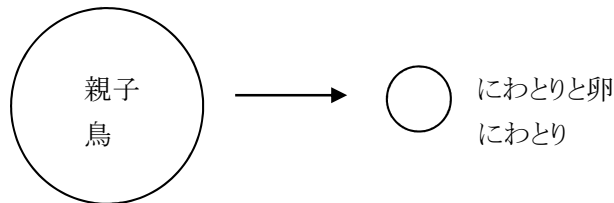
たい焼き() たこ焼き() 焼き鳥()

月見うどん() 親子丼() きつねうどん()

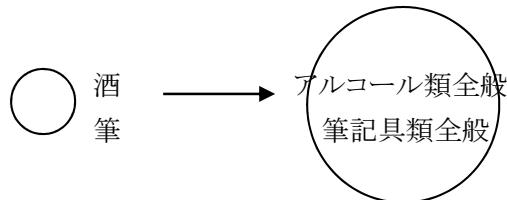
両手に花() 花見()

6. 3 シネクドキの2種類

1. 類で種を表す → 意味の()
親子(どんぶり) → 類(集合)によって種(特定: 鶏と卵)
焼き(鳥) → 類(集合)によって種(特定: 鶏)



2. 種で類を表す → 意味の()
酒 → 種(特定; 日本酒)によって類(集合: アルコール類全般)
筆(入れ) → 種(特定: 筆)によって類(集合: 筆記具類全般)



「お酒は二十歳を過ぎてから」という言葉は、日本酒だけでなく、他のアルコール類すべてについて言っている。従って、「お酒」は種 → 類のシネクドキである。

6. 4 次の語義の変化は、どの比喩に基づくか

次の語義に見られる意味拡張は、3つの比喩のどれに基づいているのか、

「メタ」、「メト」、「シネ類→種」、「シネ種→類」のいずれかで答えなさい。

run	走る	→ [液体が走る] 流れる、[事業を走らせる] 経営する
table	テーブル	→ [平らな面] 一覧表
strong	強い	→ [物事の調子などが強い] 濃い
long	長い	→ 長さが～の
pretty	かわいい	→ [プラスの値が程度の値に] かなりの
study	勉強	→ [勉強する部屋] 書斎
iron	鉄	→ 鉄製の道具
contemporary	同時代の	→ 現代の custom
custom	慣習	→ (入国時の慣習) 関税 (商取引の慣習) 愛顧
good	よい	→ [役に立つよい物] 商品
	よい	→ [肯定的評価] 十分な
game	原義「楽しみ」競技	→ [楽しみである狩りの] 獲物
book	本	→ [帳面に記録する] 予約する
dress	衣服を着せる	→ [整える] 軍隊が整列する
good	よい	→ [たっぷりあるとよい] 十分な
old	年を取った(年老いた)	→ 歳が～の

7. 言語表現の動機づけ

言語表現や構文を機械的に記憶するのではなく、なぜ、そのような意味になるのかを考えながら言語表現の有意義的学習をする習慣を持たせた。

言語表現は概念的に動機づけられている(cognitively motivated)。

なぜそういう形をしているのか？

言語は動機づけられて(motivated)おり、大方において説明可能(accountable)

They'd hate to be remembered as anything butordinary.

Which is exactly what they were. Anything but ordinary.

But they will live on through their children in all our hearts.

(映画“The Glass House”の一場面より)

butを含む熟語の trio

次の成句の意味はどのように概念的に動機づけられているのか？

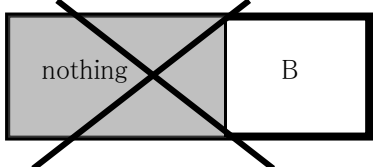
nothing but	～だけ
anything but	～ではない
all but	ほとんど～

but の意味

Everyone went there but he didn't. 「しかし」、つまり、but = 例外、除外の意味

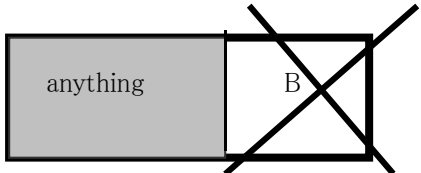
nothing but B

B を除いて0 → B だけ、ほんの



anything but B

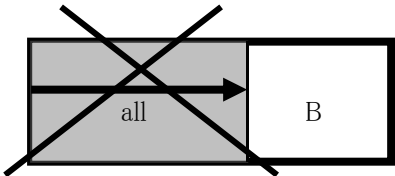
B を除いて、すべて
→ まったく B ではない



all (副詞=すっかり) + but (=B を除いて)

all but B

B を除いてすっかり
→ ほとんど B



Put into English.

彼はほんの子供だ。
彼はまったく紳士ではない。
彼は死にそうだ(瀕死の状態だ)。(ほとんど死んでいる)

「A するとすぐ B」の 3 種類の表現

1、hardly A when B

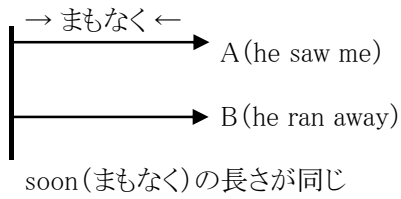
A をほとんどしていないうちに B = 「A するとすぐ B」

この間ほとんどない

He had hardly seen me when he ran away.
He had scarcely seen me before he ran away.
私をみるとすぐ 彼は逃げた

日本語の「～するとすぐ、、、」も 1 の捉え方
以下は英語特有の捉え方

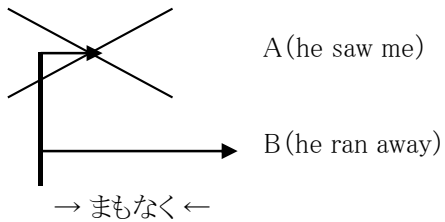
2. As soon as A, B



Aまでと同じくらい soon に B = 「A するとすぐ B」

As soon as he saw me, he ran away.
私をみるとすぐ 彼は逃げた

3. no sooner A than B



soon(まもなく)の長さが同じ

Aまでが Bまでより より soon(まもなく)ではない
= 「A するとすぐ B」

He had no sooner seen me than he ran away.
私をみるとすぐ 彼は逃げた

- 1では A が B より前時と捉え(否定することになるが)、A は過去完了、B は過去
2では AB が同時と捉え、AB どちらも過去
3では A が B より前時と捉え(否定することになるが)、A は過去完了、B は過去

8. 日英語対照分析

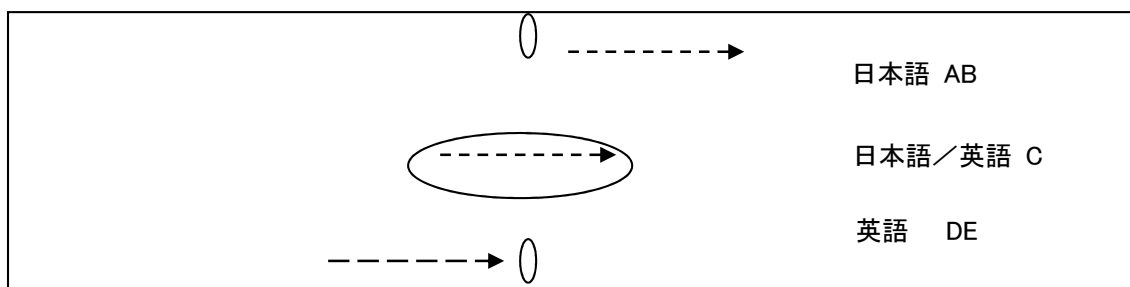
8.1 日英での発想の違い

日常生活で日本語を使って生活をしている日本人にとって、異なった概念化に基づく言語である英語と日本語との違いを知ることは、英語の効率的学習に反映できる。

日本語の「～している」と、英語の進行形、完了形

(バスは止まっている)	The bus is parked.	A
(学校は丘の上に建っている)	Our school stands on that hill.	B
(バスが走っている)	The bus is <u>running</u> .	C
(バスが止まりかけている)	The bus is <u>stopping</u> .	D
(彼は明日アメリカへ発つ予定だ)	He is <u>leaving</u> for America tomorrow.	E

次図において、楕円はできごと、破線は状態の継続を指す。



～している	be ...ing	
バスは止まっている。	×The bus is stopping. ○The bus has stopped. ○The bus is parked.	○----- 先行できごとの 結果状態の継続 A
彼はそれを知っている。	×He is knowing it. ○He knows it.	----- 状態の継続 B
彼は勉強している。	He is studying.	○○○○○○○○ C 動作の継続
×バスは止まっている。 ○バスは止まりかけている。	The bus is stopping.	----- ○ D 後続できごとへの 準備状態の継続
彼はアメリカに発つ予定だ	He is leaving for America.	E

8. 2 コミュニケーション上の摩擦

事例 1 2言語で対応していると思われる語について、実は世界の区切り方が違う

I have no doubt that he is ill. の意味は、「彼は絶対病気だと思う」
しかし、「彼が病気であるという疑いを持たない」では、その意味が出てこない。それはなぜか。
疑う(疑い) = doubt ではなく、
疑う(疑い) = doubt + suspect (suspicion) であることに気づいていないからである。

～であると疑う ～ではないと疑う
suspect / doubt
「疑う」

実は、「疑う」は多義語であり、I have no doubt that he is ill. の正しい意味は、
「彼が病気()という疑いを持たない」→「彼は絶対病気だと思う」

類似事例

*He drowned but he was saved.

*I persuaded him to go there, but he didn't go there.

drown = 溺れる persuade = 説得する ではない
drown = 溺れ死ぬ persuade = 説得し成功し行動に移させる

事例 2

否定疑問文で「はい」、「いいえ」と Yes、No がなぜ異なるのか？

「お腹、空いていませんか？」

空いている場合

「いいえ、空いています」

空いていない場合

「はい、空いていません」

Aren't you hungry?

空いている場合

Yes, I am (hungry).

空いていない場合

No, I am not (hungry).

なぜ異なるのか？

→ 「はい」、「いいえ」と Yes、No は、違う機能をしているため

「お腹、空いていませんか？」

いいえ	空いています
はい	空いていません

↑

日本語では、相手に同意するか同意しないか応答する機能、がある。

	Yes, I am (hungry).
	No, I am not (hungry).

↑

英語では、相手に同意するか同意しないか応答する機能、はない。

英語の Yes, No の機能

Yes →次に肯定文が続くし

No →次に否定文が続くし

事例 3

太平洋戦争末期の日本語から英語への翻訳

『ベルリッツの世界言葉百科』に「言葉が歴史を変える例」として、日本語の「黙殺」の英訳が紹介されている。

「もしたった一語の日本語を英訳する仕方が違っていたら、広島と長崎に原爆が投下されることはなかったかもしれない」

太平洋戦争末期、連合国側は、ポツダム宣言を発表し(1945年7月26日)、日本の無条件降伏を要求してきた。鈴木貫太郎首相は、もっと様子を見てから最終決定に踏み切ろうという「静観したい」という意味を表すつもりであった。しかし、国民が決死の覚悟を強いられている当時の状況の中、弱気の発言をすることは不可能であった。そのため、強い言葉で表現せざるを得ず、「黙殺する」という表現をした。それを、日本の通信社が ignore と英訳し、連合国側が reject と解釈した。後年、通信社の関係者は「今ならノーコメントと言うところで、そうっておけば連合国側の受け取りも違っていたかもしれない。しかし当時の日本国内ではそういう英語表現を誰も知らなかった」と述べたとされている。

当時の状況から、首相が弱気の発言ができなく、「言い争うことから自分の位置を低めることなく、知らないふりをして、相手にしないことにより自分の高さを保つ」という微妙な日本人の心理が関係していたと考えられる。首相の「黙殺」という言葉の心理的背景を理解し、どのような英語に訳すべ

きで、その英訳によって、どのように相手方の反応があるのか、そこまでを考えた上で、大局的な見地から適切に英訳できるためには、当時の国際情勢を理解し、言葉に対する鋭い洞察と、日英表現の微妙な違いを理解する語学力が必要であろう。

結果としてポツダム宣言を拒否したと受け取られ、広島・長崎への原爆投下を踏み切る都合のよい口実を与えたという考えがある。しかし、それは事実ではなかろう。実際は、既に原爆の投下は決定されており、いずれ投下されていたのであり、「原爆投下を正当化するのに都合よく使われた」というのが真相であろう。そうであれば、『ベルリッツの世界言葉百科』の記述の「広島と長崎に原爆が投下されることはなかったかもしれない」は連合国側に都合の良過ぎる考えである。

連合国側の「原爆投下を正当化するのに都合よく使われた」英訳と、それによる相手方の反応はどのような過程を経たのか。

黙殺する → ()という首相の発言の意味合いを、
黙殺する → ()と日本の通信社が英訳したため
黙殺する → ()と連合国側が都合よく解釈した。

no comment reject ignore

8. 3 認知的な理解から身体を用いての定着へ

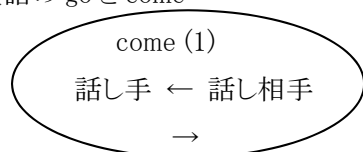
日英対照ということでは、“go/come”と「行く／来る」の発想の違いの学習が、すぐに思い出される。中学校以来、学習をしてきたよく知られたケースではあるが、大学生のすべてが、次の()内に正しく go と come を入れられるわけではない。

- | |
|---|
| 0 「話し手 と 話し相手」から離れてどこかへ移動する場合
I'll () to Tokyo tomorrow. |
| 1 「話し手 と 話し相手」同士が近づく場合
I'll () to your house tomorrow |
| 2 「話し手 が 話し相手」についてどこかへ行く
May I () with you? |
| 3 第三者が「話し手 か 話し相手」に近づく場合
They'll () to your house tomorrow. |

認知的な説明としては次図で示すことができる。しかし、概念による理解はできても、実際に間違いなく使えるかというそうではない。今年、3人の学生を教壇に来させ、「話し手」、「話し相手」、「第三者」の役を演じさせ、タフロープで円を作り、下図を実演させてみた。授業に対する学生のアンケート結果では反応はとてもよいものであった。「認知的な理解」を「身体を用いての定着」に至らせる工夫を今後も考えて行きたい。

go / come と行く / 来る

英語の go と come



→ go (0)
← come (3)



9. まとめ

英語と日本語は言語的距離 (linguistic distance) の開きが大きく、対極的な言語であると言われている。そのため、明示的に文法や発音の違いを理解させ、その上で、音声訓練を通して自動化する必要がある。英語運用能力に向けた実践的訓練が一層重視されることになっても文法・読み・書きの重要性が低下するわけではなく、むしろ、文法指導の改善による「効率的学習」が必要とされる。本稿では、筆者が担当している授業において扱っている認知言語学の応用の中から、3点について報告をした。3点とは、比喩的意味変化による多義語の学習、言語表現の機械的記憶ではなく、その構成、動機づけを考へての有意義的学習、そして、日英対照分析による、概念化の違い、語義の比較を通しての学習である。授業に対する学生のアンケート結果を見ると、8.3で示した「認知的な理解から身体を用いた定着へ」の学習内容が特に好評を示していた。文法知識を「宣言的知識」ではなく、「手続き的知識」とすること、このことがとても大事であることを忘れないようにしたい。

参考文献

- Ausubel, D.P. and G. R. Robinson. (1969) *School Learning*, Holt, Rinehart and Winston. (吉田章宏・松田弥生 (訳) (1984) 『教室学習の心理学』黎明書房.)
- Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar vol.1: Theoretical Prerequisites*, Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar vol.2: Descriptive Application*, Stanford, California: Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1995) "Raising and Transparency." *Language* 71: 1-62.
- 岡田伸夫 (2004) 『英語教育と英文法の接点』美誠社.
- 白井恭弘 (2008) 『外国語学習の科学 —第二言語習得論とは何か—』岩波書店.
- 西林克彦 (1994) 『間違いだらけの学習論 なぜ勉強が身につかないか』新曜社.
- 野村益寛 (2014) 『ファンダメンタル認知言語学』ひつじ書房.